

高校生の進路選択における親子間葛藤とその対処方略が 自己肯定感に与える影響

Parent-child conflict in the course selection of high school students and its coping strategies
influence on self-affirmation

桃崎 沙耶
Saya Momosaki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：進路選択，親子関係，自己肯定感

Key words：Course selection, Parent-child relationship, self-esteem

1. 研究目的

高校卒業後の進路選択は高校生にとって将来に影響する大きな決断であり，親子で共有される問題の1つである。子どもの決断には親の意見も影響を及ぼすことが明らかにされており，少なからず意見の不一致が起きる可能性も示唆される。

進路選択に関する心理学的な研究では，進路決定後の適応や進路選択自己効力についての研究が多い（富永，2008）。両親との話し合いが必要である今日の高校生の進路選択場面において，その葛藤時に両親とどのようなコミュニケーションを取ったのか，その葛藤をどう乗り越えたかは，その後の子どもの自己肯定感に影響を及ぼし，さらにその後の進路選択場面でも影響を及ぼすものと推察される。進路選択は，臨床場面において直接的なテーマとなることは少ないとしても，クライエント自身のこれまでの生き方（意思決定）を振り返る中で重要な視点となるものといえよう。青年期初期の進路選択場面の葛藤，特に学生時代の自立していない時期の親子間の葛藤がどのような影響をもたらすのかについての研究も必要であると考える。

本研究では，日常生活における親子間コミュニケーションと葛藤対処方略が，進路選択場面においてどのように影響を及ぼすのかを明らかにすること，またその進路選択場面における親子間コミュニケーションが子どもの自己肯定感と進路選択自己効力にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究実施内容

調査は，個別自記入式の質問紙調査で，大学構内で筆者からの個別の依頼に応じて回答する個別回収式で行われた。回答依頼時に，文書と口頭で説明し合意を得ており，謝礼は提示していない。回答は全て無記名で行われた。実施時間は，依頼・説明・回答を含めて20分程度であった。

調査実施期間は2019年11月7日（木）～11月20日（水）で，調査対象者は都内の私立大学に通う女子大学生1年生から4年生，女子大学院生の計320名であった。平均年齢は19.71歳（SD:1.26:18歳～24歳）であった。

本調査の質問紙は表1に示すように，設問1から設問6で構成された。

表1. 質問紙の構成

- | |
|--|
| 1 進路選択自己効力尺度（富永，2006）[設問1] |
| 2 親子間葛藤方略尺度（加藤，2003より改訂）[設問2] |
| 3 進路選択における親子間コミュニケーション尺度（高橋，2008;2009）[設問3] |
| 4 直接的コミュニケーション尺度（板倉，2013）[設問4] |
| 5 自己肯定感尺度（樋口・松浦，2002）[設問5] |
| 6 高校時代の進路選択における両親との葛藤の有無と影響を問う質問（自由記述含む）とフェイスシート [設問6] |

全調査対象者320名の内，明らかな虚偽回答を

含むと判断されたもの、設問 1~5 の調査項目に不備のあったもの、25 歳以上の回答者を除いた結果、有効回答票は 269 票で、有効回答率は 84.1%であった。

自己肯定感尺度の下位尺度を合成得点とした際の、それぞれの尺度が自己肯定感及び進路選択自己効力に及ぼす影響を検討するため、Amos を用いて共分散構造分析を行った。モデルは第 1 水準に日常における親子間の「直接的コミュニケーション」、第 2 水準に日常における「親子間葛藤方略尺度 (4 下位尺度)」、第 3 水準に「進路選択における親子間コミュニケーション尺度 (6 下位尺度)」、第 4 水準に「自己肯定感」、第 5 水準に「進路選択自己効力」を構成し、相関関係が認められた尺度間にのみパスを設定した。有意でないパスを削除、修正し、誤差に対して共分散を設定した。

解析の結果、GFI=.967, AGFI=.928, RMSEA=.042 とモデルを支持する適合度が得られた。

まず“自己肯定感”に有意な直接パスが認められた変数は、日常の親子間における“直接的コミュニケーション ($\beta=.25, p<.001$)”、親子間葛藤方略の“回避スタイル ($\beta=.12, p<.05$)”と“強制スタイル ($\beta=.19, p<.001$)”、進路選択時の“議論による立場の明確化” ($\beta=.18, p<.01$)”と“従順 ($\beta=.15, p<.01$)”であった。

進路選択における“議論による立場の明確化”は、日常の親子間葛藤対処方略の“問題解決スタイル ($\beta=.13, p<.05$)”から有意なパス、“従順”は“自己譲歩スタイル ($\beta=.45, p<.001$)”から有意なパスが認められた。日常の親子間葛藤方略の“問題解決スタイル”は日常の“直接的コミュニケーション”から有意なパスが認められた。

最後に、将来の“進路選択自己効力感”は“自己肯定感 ($\beta=.15, p<.01$)”、進路選択時の“協力 ($\beta=.14, p<.05$)”と“議論による立場の明確化 ($\beta=.13, p<.05$)”親子間葛藤方略の“問題解決スタイル ($\beta=.28, p<.001$)”と“強制スタイル ($\beta=.14, p<.05$)”からの有意なパスが認められた。

3. まとめと今後の課題

日常生活における親子のコミュニケーションが密接であるほど、親子で葛藤が生じた際に子どもは問題解決を図ろうとすると示唆された。普段から親子間で話をする事の多い親子は、互いの考えを知る機会も多くなり、従って親子間で葛藤が発生した場合に問題解決を図ることが多くなるのではないかと推察される。このような問題解決ス

タイルが、進路選択場面においても、親子間で議論したり、お互いの立場を考えて進路を決定しようとする態度や行動に影響することが示された。普段から親子で互いについて知っているからこそ、子どもの進路選択時に両親は子どもの選択に協力的で、子どもは意見が異なった場合も話し合おうとするのだろう。

進路選択場面における親子間コミュニケーションの“協力”からは“進路選択自己効力”に肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなった。両親が協力的であることが子どもの進路選択自己効力の向上に影響することは、子どもの進路選択に両親の影響が大きいためであると考えられる。

“議論による立場の明確化”からは、“自己肯定感”、“進路選択自己効力”に肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなった。進路選択において親と議論を積極的に行ったことで、子どもが自分の意見を伝え深めることができ、自己肯定感の向上に繋がったためではないだろうか。その経験が今後の進路選択場面でも自分の決断に自信を持つことへ繋がっていると推察される。“従順”からは“自己肯定感”に肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなった。両親の意見に従うことでいい子の自分であることができる為、自己肯定感を低下させず、いい子の自分に満足できるのではないかと考えられる。

“自己肯定感”からは“進路選択自己効力”に肯定的な影響を及ぼすことが明らかとなった。自分が自分であって大丈夫であるという感覚は、進路選択においても自身の決断を信じるための基盤の 1 つとなりうると予測され、進路選択自己効力の向上にも影響するのだろうと推察される。

本研究は、大学生または大学院生に高校時代の進路選択を振り返る形で質問紙に回答を求めた。そのため、自己肯定感に関しては現在のものであり高校の進路選択後すぐのものではなく、回答者によって学年も異なるために進路選択の影響がどれくらい及んでいるかは定かではない点に留意しなければならない。また同様に進路選択自己効力についても、就職活動後の 4 年生、直前の 3 年生、その他の学部 1,2 年生と大学院生では、影響が異なると推測される。

4. 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 30 年度大学院生研究助成(B)(DB1925)「進路選

扱における親子間葛藤が対処方略に与える影響」より研究助成を受け行ったものである。